研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著， 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
(著書(欧文)) 1. なし				
(著書(和文)) 1. 保育者養成シリーズ「障害児保育」	共著	2012年8月	一藝社	林邦雄・谷田貝公昭監修、青木豊編集。第14章「障害児保育に関わる施策上の課題」及び第15章「障害児保育の事例演習」を執筆担当。
2. 「生きる力を育てる臨床心理学」□	共著	2015年3月	保育出版社	小林芳郎(編)。ｐ128－132；第7章生きる力が立ち直る「心理臨床」第3節の発達的な障害と心理臨床－3言語障害　を執筆担当。
3. 子育て講座第1回“「食べる」と「しゃべる」は賢さを生む”	単著	2020年12月	下妻市保健センター母子保健係	下妻市保健センター主催で全3回の字幕付き動画配信講座にて講師として登壇。申し込むと市外在住者でも動画を視聴できる。食行動がいかに乳幼児の精神・運動両面の発達を促すか解説。コロナ禍にあるが他者(大人)の適切な働きかけが乳幼児の健全な発達に欠かせないことを説いた。
4. 子育て講座第2回“イヤイヤ期以降の、こころを育てることばかけ”	単著	2021年1月	下妻市保健センター母子保健係	下妻市保健センター主催で全3回の字幕付き動画配信講座にて講師として登壇。申し込むと市外在住者でも動画を視聴できる。自我が芽生え始めた2歳代からの幼児の自己肯定感をいかに育むかが健やかな心身の成長にとって重要であることを解説。アンガーマネジメントトレーニングについても触れた。
5. 子育て講座第3回“いっぱいなでて育てましょう　～こころの落ち着いた子を育てるには～”	単著	2021年2月	下妻市保健センター母子保健係	下妻市保健センター主催で全3回の字幕付き動画配信講座にて講師として登壇。申し込むと市外在住者でも動画を視聴できる。心地よい身体接触で満たされることで脳が幸福感を感じる物質を多く分泌し穏やかで安定的な性格形成がされることが小児脳科学の知見によって明らかになっていることについて解説。日々の子育ての中でできる触れ合いの工夫について説いた。
(学術論文(欧文)) 1. なし				
(学術論文(和文)) 1. なし				

(紀要論文) 1. 「いわき明星大学心理相談ｾﾝｱｰ心理臨床家養成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの試行と検討(1)：ｾﾝﾀｰと研修員の社会性について」	共著	2005年3月	いわき明星大学心理相談センター紀要 創刊号　ｐｐ11-19□	社会性ある臨床心理士の人材育成のために当ｾﾝﾀｰが行った独自の養成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの詳細を報告するとともに、本ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑが全体として社会性育成の実現にどのように貢献しているかを考察した。
2. 「心理臨床の初学者がいかに感受性を鍛えるか：臨床動作法体験の可能性に関する論考」	単著	2007年3月	いわき明星大学心理相談センター紀要 第２号　ｐｐ56-65	心理臨床家の職業的発展のために磨くべき感受性とはどのようなものであるか、先行研究を概観し、臨床動作法を実習することがセラピストにとっての感受性訓練として効果をもちうる可能性を考察した。
3. 「指定大学院(一種）修了生が役立った内部実習：インタビュー調査から見えた1期生と2期生の評価の違いから」(査読付き)	単著	2007年12月	お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要　第10号　ｐｐ13-26	指定大学院1期・2期修了生を対象に行った半構造化面接調査の結果をまとめ、修了生が現場に出て求められていると感じる技能や現場に出て「役だった」と感じた内部実習活動をカテゴリ化し、分析した。
4. 「心理臨床家の感受性訓練に関する研究動向：大学院生への臨床動作法導入の意義」	単著	2008年3月	いわき明星大学心理相談センター紀要 第4号　ｐｐ45-64□	心理臨床家が訓練すべき感受性を義したのち、これまでの感受性訓練に関する国内外研究を概観。「からだを通した体験」をキーワードに据えながら整理した。加えて、臨床動作法の効果に関してこれまで蓄積されてきた知見を概観し、大学院教育プログラムにおいて臨床動作法体験実習を行うことによって期待できるものを考察し、今後の研究課題を展望した。
5.				
(辞書･翻訳書等) 1. ｱﾒﾘｶ心理学会(APA)承認単位取得ｺｰｽ「PER心理療法講座」完全日本語翻訳版通信教育講座第10章“Mind　-Body Therapy(ﾏｲﾝﾄﾞ・ﾎﾞﾃﾞｨｰ療法と催眠療法)”	共	2003年	ｶﾚﾝﾄｻｲｺｾﾗﾋﾟｰ研究会出版	Psychotherapy with the experts(著名セラピストによる心理療法)シリーズ第10巻。本療法の大家Dr.Ernest Rossi氏による本療法に関する解説21分、実際のｸﾗｲｴﾝﾄに対するｾﾗﾋﾟｰｾｯｼｮﾝ43分、ｾﾗﾋﾟｰｾｯｼｮﾝ後の振り返りと解説43分から成るﾋﾞﾃﾞｵ教材を翻訳。(巻末テロップ表示：翻訳：衣川将介、海老名悠希。監訳：長谷川千洋)□
2. ｱﾒﾘｶ心理学会(APA)承認単位取得ｺｰｽ「PER心理療法講座」完全日本語翻訳版通信教育講座第12章“Existential-Humanistic Therapy(実存ー人間主義療法)”	共	2003年	ｶﾚﾝﾄｻｲｺｾﾗﾋﾟｰ研究会出版	Psychotherapy with the experts(著名セラピストによる心理療法)シリーズ第１２巻。翻訳ﾁｪｯｸを担当。(巻末テロップ表示：翻訳：衣川将介、海老名悠希。監訳：長谷川千洋)

3. 「ブリーフセラピーの技法を越えて：情動と治療関係を活用する解決志向アプローチ」第7章「サメーション・メッセージと提案」 4.	共	2010年	金剛出版	宮田敬一・窪田文子・河野梨香　監訳。“Beyond Technique in Solution Focused Therapy”,Guilford (2002) の訳本。 第7章「サメーション・メッセージと提案」　の翻訳を担当。
(報告書･会報等) １ 「話の終わらない老年期鬱病女性の事例」		2002年　6月	精神療法研究会	精神科医療の保険診療枠内で行ってきた鬱病女性との心理面接経緯を報告。面接終了時間が近づいてくると必ず重要な話題を語り始め、面接が終了できなくなる点を検討点として挙げ、その背景と今後の対応を確認した。
２ 「遺伝か環境か？：ある子育て相談事例を通して」		2003年11月	さちクリニック勉強会	発表者にとってのイニシヤルケースを発表。長男の言葉の発達の遅れ、衝動のコントロール、認知の遅れを主訴に来談したが芸術家としての独特の子育て観を有し、人格障害の疑いがある母親の子育て手法が児の発達のいびつさに相当影響していると考えられたケースについて、終結に至るまでの経緯を振り返った。
3. 「時々〈爆発〉するほど頑張りすぎる統合失調症の女性との面接」		2004年　7月	精神療法研究会	軽度の思考伝搬、頭の中での幻聴様体験、思考障害(考えがまとまらない)を主訴として精神科通院加療中の女性との継続面接経緯を発表。関わりの中でこれまでに達成できた点と今後の課題を確認した。
4. 「薬物療法に効果がみられない女性との面接課程」		2004年12月	さちクリニック勉強会	「今は落ち着いているが胸のあたりが苦しくなったり気分が沈んだりリストカットをしてしまう」と訴えて精神科に通院するが、薬物療法の効力がないことから心理療法オファーとなった女性クライエントとの面接経過をまとめ、ケースの見立てを中心に再検討した。
5. 「ロールシャッハテスト実施時のやり取りを振り返る」		2005年　8月	臨床家育ちの会	ロールシャッハテスト施行時に録音されたテープ、テープでのやり取りを文字に起こしたプロトコルを基に、ロールシャッハテストイニシヤルケースを、自由反応段階、質問題界でのやり取り中心に振り返った。実際のテスト実施場面を想定しながら、起こりうる問題や留意点を議論し、対処に困る事例などを自由に出し合い、ロールシャッハテストにおける正確な査定の上で如何に実施時のテスターの教示が重要であるかを学んだ。

6. 「軽度発達障害が疑われる男児とのプレイでのやり取り」		2006年　1月	臨床家育ちの会	1年4か月の面接過程について、①子どもへのインテークの仕方について（成人に対する面接とどこが同じでどこが違うのか）②診断名がついている子どもが、自分の診断名について語るときの対応③面接の枠を守る重要性について―保護者から託される手紙の意味の検討④両親を治療構造に引き入れる努力をすることについて⑤性への目覚めへの対応の在り方、以上を議論した
7. 「軽度発達障害が疑われる男児とのプレイでのやり取り・その後」	単	2007年　4月	臨床家育ちの会	1年前に同会に出したケースのその後の経過を提示し、事例検討を行った。1年の間で主訴に顕著な改善が見られたことにより結果として発達のアンバランスさが露呈される展開となったもの。本ケースは精神医学的診断が非常に困難であった為、治療展開を眺める中で見立てがどのように変化していったのか振り返った。そのうえでどのような要素が治療的改善を生んだと考えられるか議論した。
8. 「アスペルガー障害診断を受けた男児の強い強迫性症状」		2007年　5月	山花塾	いわき市立美術館(編)。2012年7月7日に展示室にてブース開設し開催された「体と心の緊張をほぐす、リラックス体験ワークショップ」の実施報告。当日は29人が参加し、初めてのリラックス動作法体験をした様子を写真を交えながら報告した。
9. . 「ある芸術家女性との面接：非凡と狂気の狭間で」		2007年　8月	ＥＮの会	4年間にわたって情緒不安定・無気力・悲観・焦燥感がずっと続いている芸術家女性との全7回の面接過程を報告。本ケースにおける治療契約や目標設定をブリーフセラピーの視点から検討した。
10. 「ある芸術家女性との面接：芸術家にとっての狂気とは」		2007年12月	臨床家学び育ちの会	4年間にわたって情緒不安定・無気力・悲観・焦燥感がずっと続いている芸術家女性との全7回の面接過程を報告。心理面接の終結評価について検討した。終結というテーマは、クライエントにとっての体験がどうであったかを主軸に評価することが重要である事が確認された。

11. . 「強い強迫症状を持つ男児とのプレイセラピー」		2008年　4月	神田橋スーパービジョンの会	強い強迫観念と強迫行為を持つ発達障害の男児との遊戯療法による3年間のかかわりを報告。強迫症状が落ち着いた経緯を振り返る中で、これまでのかかわりの何が効いていたかを検討。両親の男児の障害受容の課題を今後どのように扱っていったらよいのか方針を確認した。
12. 「ある女性との面接過程：〈狂気〉を〈芸術〉に」		2008年　5月	熊倉ゼミ	4年間にわたって情緒不安定・無気力・悲観・焦燥感がずっと続いている芸術家女性との全7回の面接過程を報告。自らのなかにある狂気と芸術への転換の狭間に揺れるクライエントの内界と、現実との折り合いがつくまでを振り返り、再検討した。
13. 「どうしても娘を信じられない母親との言語面接」		2008年　6月	ＥＮの会	長女が気がかりで仕方なくかえって煙たがられてしまうという主訴のクライエントとの全4回の個人心理面接の経緯をまとめ、今後の面接方針を再確認した。
14. 「『火中の栗を拾う』というあり方に寄り添うということとは」		2008年　8月	熊倉ゼミ	複雑な恋愛遍歴の末に結婚に至った妻に自殺された男性に対するこれまでの11回分の危機介入的対応を報告。クライエントの精神状態、病理水準について確認し、今後の対応方針を明確にした。
15. 「不登校息子をめぐる夫婦との面接過程」		2009年　2月	熊倉ゼミ	息子の登校拒否を主訴として両親で来談し続けているクライエントとの3年にわたる心理面接経緯をまとめた。両親が息子に対して強く感じているであろう「気が狂ったのではないか」という恐怖感を中心にこれまでの面接経過を振り返り、今後の方針を検討した。
16. 「『これからどのように生きていけばいいのでしょうか？』」		2009年　6月	村熊ゼミ	非常に複雑な相談歴・生活歴を有し、自己決定力が低く自立度が弱く生活保護にて生活する女性が「これからどうやって生きていけばよいか」という主訴で来談した。福祉的援助を主流に援助していくべき本事例に対し、一介の心理士として何ができるのか、地域の中での連携機関とのつながり方を中心に検討した。

17. 「複数の地域資源につなげながら支援している家族の事例」		2009年　10月	福島メンタルヘルスネットワーキングセミナー09	面接室の中での一対一のかかわりではなく、広く地域の支援資源に繋げながら家族全体を包括的に支援していく必要があった深刻なケースについて、支援の経緯とケースに導入された地域資源の対応関係を示しながら、power pointアニメ―ションを作成し発表。対人相談業務にある関連職種と共にこれまでの展開を振り返り、今後ケースに対し繋げうる地域資源について議論した。
18. 「心をやわらかく～プラスもマイナスも楽しもう」	単	2010年1月	(株) いわきジャーナル　City magazine月刊りぃ～ど２月号p9－10	特集「優しく、愛して…」にて執筆依頼あり、寄稿。氏名所属を含む記事が掲載される。
19. 「福島県における取り組みの概要-いわき市支援体験(1)」	単	2013年2月	―ストレスケア東北ネット中間報告書―リラックス動作法による東日本大震災被災者支援　p74-77	東日本大震災直後に発足したリラックス動作法による東日本大震災被災者支援団体「ストレスケア東北ネット」の一員として避難所や仮設住宅にてボランティア活動をした筆者が、メインの活動エリアであった福島県いわき市内での2011年4月11日～2012年9月11日までの1年半の活動記録を集計。どんな人々に支援が届いたかを考察したうえで、震災後の福島に生きる人々に動作法を用いて支援することの意味を考察した。
20. 「体と心の緊張をほぐす、リラックス体験ワークショップ」	共	2013年5月	いわき市立美術館ワークショップ＆コンサート「みんなで元気になるアートのひろば」活動報告書p25	いわき市立美術館(編)。2012年7月7日に展示室にてブース開設し開催された「体と心の緊張をほぐす、リラックス体験ワークショップ」の実施報告。当日は29人が参加し、初めてのリラックス動作法体験をした様子を写真を交えながら報告した。

21. 一歩一報　新連載「ストレスケア」第2回～第7回 22. 23.		2015年4月～10月 (第24 - 29号)	みんぷく：3.11被災者を支援するいわき連絡協議会	2013年6月創刊の毎月1回の定期刊行物「一歩一報」において、連載執筆を担当。第1回「ストレスと上手に付き合う」にて、いわきストレスマネジメント研究会代表鈴木慎一氏が、リラックス勉強会の活動について紹介する記事を執筆したのを受けて、2回～7回まで(最終回)を担当した。本誌はいわき市内を中心に仮設住宅と避難所に無料配布され、ボランティア支援に訪れると記事に関する感想を伝えてくれる方が多かった。第2回：「慣れ」からくるストレス/第3回：「忘れる」のではなく「収める」/第4回：動かさないと、弛まない/第5回：頑張り続けていませんか？/第6回：からだは口ほどにものをいう/第7回：病は気からは本当です
(国際学会発表) 1. “A study to re-define school adjustment” 2.	単	2004年8月8 - 13日	第28回国際心理学会義(International Congress of Psychology 28th)大会ﾎﾟｽﾀｰ発表	日本心理臨床学会による2004年度日本心理臨床学会国際学会参加助成対象としての研究発表。日本における学齢児の学校適応に関する研究動向を紹介し、近年日本の学齢児が学校に対して求めている＜安心感＞を得たいというﾆｰｽﾞについて、量的分析結果を報告した。
(国内学会発表) 1. 「学齢児が学校で抱く安心感と学校享受感」□	単	2004年10月9 - 11日	第46回日本教育心理学会大会ﾎﾟｽﾀｰ発表□	都内在住小学5年生計500余名を対象に、質問紙調査を量的分解した。確認的因子分析等の結果より、学齢児にとっては、学校でｽﾄﾚｽを発散できたりほっと一息ついたりできる(＝＜安心感＞の獲得)ということが、楽しさを感じたり知的好奇心を刺激されることと並んで重要であることを考察した。
2. 「初学者が現場で有用視されるには？：指定大学院専任カウンセラーの視点から」□	共	2007年9月27 - 30日	日本心理臨床学会第26回大会　自主シンポジウム２４	「心理臨床家の教育・訓練をめぐる課題について」における話題提供。臨床心理士としての成長初期にある人にとってどのような訓練が必要であり、現実の教育訓練にはどのような長所と問題点があるのか吟味した。

3. 「指定大学院（一種）修了後の院生が現場に出て感じる事：インタビュー調査から見えてきた教育・訓練上の課題」	共	2008年9月4－7日□	日本心理臨床学会第27回大会　自主シンポジウム３２　シンポジスト	「心理臨床家の教育・訓練をめぐる課題について（２）」　における話題提供。 心理臨床家としての発達段階の初期の焦点を当て、臨床家が抱えやすい困難や、大学院修了直後の教育・訓練にかかわる課題について検討した。
4. 「臨床動作法の脱毛症状に対する有効性：発症経緯が異なる2事例の報告を通して」□	共	2008年9月4－7日	日本心理臨床学会第27回大会　ポスター事例発表	頭部脱毛を主訴に申し込みのあった発症経緯が全く異なる2事例に対し、臨床動作法を用いて同じ技法内容で面接を試行したところ発毛が生じ主訴が解決したことを報告。クライエントの「体験」に着目し、発毛に転じる機序を考察。
5. 「声にあらわれたストレス：臨床動作法による改善報告」	単	2008年8月22日－23日□	日本臨床動作学会第16回大会　研究発表	「ストレス因」との医学的診断を受け、手立てのないまま2年放置され変化がなかった「声ががらがらにかすれて仕事に差し支える」という症状を抱えた女性に対し臨床動作法にて個人面接を行ったところ、初回セッションより症状改善し、症状消失により終結したケースを報告。クライエントにとっての臨床動作法がどのような体験であったのか、各セッションを詳細に振り返り、推察した。
6. 「声にあらわれたストレス：臨床動作法による改善報告その（２）：クライエントによるセッションの振り返りを受けて」	単	2009年10月16日－17日□	日本臨床動作学会第17回大会　研究発表□	前回同学会大会にて発表した事例について、3年ぶりにクライエントが突然来談し、自身の体験について語った内容を報告。セラピストが持っていた見立てとの相違点を整理し、臨床動作学の観点から心身症のメカニズムと臨床動作法を行う上での声かけにおける留意点を考察した。
7. . 「頭部の【脱毛】が【発毛】に転じる時に体験されること―11事例による探索的比較研究―」	共	2010年9月18日・19日□	日本臨床動作学会第18回大会　研究発表	蓄積された11の臨床事例について、特に「脱毛」していた頭部の状態が「発毛」「増毛」に転じた時の転換点前後のクライエント体験に焦点を絞って、クライエントの様子や語りを振り返り、共通点を抽出、考察した結果を発表した。
8. . 「ベトナムにおける障がい児支援としての臨床動作法の導入と展望」	単	2010年10月	愛知学院大学心理臨床センター主催第11回シンポジウム	「海外支援活動－アジア諸国におけるこころとからだへの支援―」での話題提供。日本国とベトナム国における障碍児支援にまつわる社会制度や母子保健事業の取り組みの違いを述べたうえで日本発祥の臨床動作法をベトナム国に障碍児支援の一つの大きな取り組みとして導入する意義と可能性について述べた。

9. 「臨床動作法適用により脱毛症が功奏した事例に共通する要素」	共	2010年11月	第15回日本心療内科学会学術大会研究発表	「心身症としての身体反応」のテーマのもと、パネルディスカッションに参加。医療的治療行為によって改善が得られず来談に至った脱毛を主訴としたクライエント12名に対し臨床動作法のみを用いて心理面接を施行した結果、全ての事例において発毛・育毛・増毛が生じた。この事実について、心理学的・心身医学的見地から発症機序を検討した。非常に活発なディスカッションとなった。
10. 臨床動作法による東日本大震災被災者支援：「ストレスケア東北ネット」立ち上げとこれまでの成果（第一報） □	共	2011年　11月	第16回日本心療内科学会学術大会ポスター発表□	東日本大震災発生直後に迅速に組織化された「ストレスケア東北ネット」の活動における半年間の成果をまとめ、今後の活動上の課題を展望したポスター発表（この年研究発表はこの形式しか行われなかった） （日本心療内科学会誌１５、ｐｐ１３１）
11. . ″アジア諸国における心理臨床実践の現状と課題―交流と協力の可能性を巡って―″	単	2012年　9月	日本心理臨床学会第31回学術大会　実行委員会企画シンポジウム1　シンポジスト	マレーシア、ベトナム、中国、韓国の心理臨床家が自国における社会問題や心理臨床業界の課題を発表。日本に関する話題提供者として、のテーマで「福島における心理臨床実践 ―原発事故被害にアジア思想の強みを活かすために―」発表した。[
12. ″海外におけるコミュニティ支援としての臨床動作法の活用とその課題―心理臨床を通じた異文化交流を考える―″	共	2012年　9月	日本心理臨床学会第31回学術大会　自主シンポジウム４４企画・司会者	アジア諸国で臨床動作法の活用現場にいるシンポジストと海外への発信を精力的に行っている指定討論者を招いて、臨床動作法導入における課題やコミュニティ支援の具体的手法としての発展性をディスカッションした。
13. ″福島県いわき市における 動作法を用いた被災者支援の展開～ストレスケア東北ネットによる１年半の活動成果と今後の展望～″	共	2012年　9月	日本臨床動作学会第20回学術大会研究発表	東日本大震災発生からこれまでの1年半の「ストレスケア東北ネット」の活動展開を、福島県いわき市の活動実績を中心にまとめて報告した。原発事故という特殊な被災地事情を抱えている福島県における、動作法を用いた被災者支援の成果と課題、今後の展望を考察した。
14. 東日本大震災後の2年を振り返って～子どもたちの今～	単	2013年　3月	特定非営利活動法人ひたちＮＰＯセンター・with you	競輪の復興支援事業助成を受けて開催されたシンポジウム。震災直後から常磐地域(茨城県北～いわき地区)の放射農問題に苦しむ子どもと保護者を対象に本センターで展開されてきた「こども元気プロジェクト」の活動報告、並びにいわき市の子育て家庭が置かれている現状を報告した。

15. 臨床動作法による自体軸の気づきに及ぼす効果の実証的研究～思春期における「からだ」を通した自己理解への可能性～	共	2013年　9月	日本臨床動作学会第21回学術大会研究発表	中学校現場における「自分に気づくこころとからだの授業(100分間)」の実践を基に、「自体軸感」を量的に捉える尺度を試作。思春期の生徒の「立てられなさ」に対して臨床的に有用なプログラムの試験的な実施とその効果の検討を行った。
16. 乳幼児への動作法―手のリラックス課題の活用性に焦点を当てて―	単	2013年11月	心理リハビリテーション全国大会	「子どもへの臨床動作法」に関するシンポジウムにて、臨床動作学における「手」へのアプローチ手技とその臨床的有用性を概観し、臨床実践の中で発表者が有効性を感じている手指のリラックス課題の実際(動画提供あり)と実施の際の留意点について話題提供した。
17. “東日本大震災後の福島県いわき市の家族を取り巻く現状―臨床心理士の立場から―”	単	2015年　9月	第16回日本ＱＯＬ学会	「東日本大震災後の生活復興支援とＱＯＬ」と題したシンポジウムにおいて話題提供。(座長・ＮＰＯ法人ふくしま再生の会　中町芙佐子氏、社団医療法人養生会かしま病院医療安全室長・鈴木慎一氏)
18. 5年を経過して、いわき市内の家族支援現場で感じる震災の爪痕―臨床心理士の立場から―	単	2016年　8月	平成28年度Quality of Life研究会	「ＱＯＬの立場から望ましい災害時対応を考える」をテーマとした夏季研究会にて特別講演に登壇。放射能被害を恐れる緊張下の中子育てしてきたいわき市内の家庭を取り巻く支援状況の推移をまとめ、報告した。
19. 職場におけるストレスマネジメントに取り組んで～臨床動作法を用いた実践演習とアンケート結果の報告～	共	2016年11月	日本看護協会県北看護実践検討会	医療法人蔦会アイビークリニック(病院)・いちご苑(施設)　全職員のべ595名を対象として開催されてきた臨床動作法を用いた継続研修の取り組みを紹介するとともに、ストレスとその対処法への参加者の意識の変化を分析。
20. 職場におけるストレスマネジメントの取り組み～臨床動作法を体感した意識調査からの考察～	共	2016年12月	第13回日立・常陸太田・ひたちなか地区看護事例発表会(公益社団法人茨城県看護協会 日立、常陸太田、ひたちなか地区 主催)	医療法人蔦会アイビークリニック(病院)・いちご苑(施設)　全職員のべ595名を対象として開催されてきた臨床動作法を用いた継続的な取り組みを通して、参加者自身のストレスとその対処法への意識の変化を分析。法人内における臨床動作法を用いたストレスマネジメント研修の有用性について考察した。

21. .医療介護現場におけるストレスマネジメント―2年間の取り組みをＫＪ法で分析してみえたもの―	共	2018年　2月	平成29年度茨城県看護研究学会―看護の可能性を求めて―	医療介護現場で働く職員に対して行われてきた実技重視の継続的なストレスマネジメント研修の具体的成果と、臨床動作法を職場のストレスマネジメント研修として活用する有用性について、研修参加者全員から収集した自由記述アンケートをＫＪ法により分析し、考察した。
22. 「協働する保育」への転換点―何が3.11後の福島県浜通りの保育現場の課題を解決してきたのか―	共	2018年　5月	日本保育学会第71回大会	吉田久仁子氏(和泉短期大学)、開沼博氏(東京大学大学院)とのシンポジウム。3.11を契機に保育者と心理士の協働する保育が実現したという視点でその具体事例を整理し振り返ることにより、3.11の被災地ではない日本の保育現場が共通して抱えている「保育現場における協働」の問題についてフロアと共有し、協働する保育を実現させうる要因やその成果、限界についてフロアと共に議論した。
23.				
(演奏会･展覧会等) 1. なし				
(招待講演･基調講演) 1. なし				
(受賞(学術賞等)) 1. なし				

研　究　活　動　項　目

助成を受けた研究等の名称	代表,分担等の別	種　類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概　　要
(科学研究費採択) 1. なし						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. なし						
(共同研究･受託研究受入れ) 1. なし						
(奨学･指定寄付金受入れ) 1. なし						
(学内課題研究(共同研究)) 1. なし						

（学内課題研究（各個研究）） 1. なし						
（知的財産（特許・実用新案等）） 1. なし						